20130309　松江市史講座

歩兵第63連隊の誘致と松江の都市社会

能川泰治（のかわやすはる）
（金沢大学人間社会研究域准教授）

はじめに　－本講座の課題－

・歩兵第63連隊（以下63連隊）が松江に誘致されるまでの経緯と、連隊誘致が松江に何をもたらしたのかということを、最近の歴史学の研究成果をふまえながら明らかにする
・近年盛んになりつつある軍隊と地域に関する研究（軍隊と都市基盤整備との関係、軍隊誘致がもたらした経済効果、戦没者慰霊のあり方等々…参考文献のｅ、f、g）

1、63連隊の誕生と松江への誘致

・1908（明治40）年11月、63連隊の兵士たちが八束郡津田村に設けられた新兵舎に入営
→市民の熱狂的な歓迎ぶりの背景にあるものは何か？

⑴63連隊の誕生
・まず師団・旅団・（歩兵）連隊とは？　→　裏面の【用語解説】参照
・日露戦争中の1905年7月留守第5師団（広島）と留守第12師団（小倉）から合計6つの補充大隊を抽出して新たに連隊を編成（当初は第16師団（京都）に所属）
・1907年の軍拡の際に新設された第17師団（岡山）の下に編成替えとなり、衛戍地を松江に、徴兵区域を島根県松江市・八束郡・能義郡・仁多郡・大原郡・飯石郡・隠岐と岡山県・鳥取県の一部とすることに決定
→63連隊誘致（1908年11月）は松江市民にとって「郷土部隊」誕生を意味する出来事

⑵熱狂的歓迎の背景にあるもの
・山陽地方と山陰地方との格差拡大と挽回のための経済振興政策
・初代松江市長福岡世徳（在任期間1889～1911）による陳情活動
・連隊誘致と同時に山陰線の延伸＝松江駅開業と馬潟港浚渫の起債許可も実現
→「軍都」になることによって経済振興を実現しようとしていた当時の松江市

※　地元からの誘致の働きかけ、特に福岡市長の陳情活動については参考文献のh、i、jが詳しい

2、連隊誘致が松江にもたらしたもの

・八束郡津田村古志原一帯に新設された軍事施設（兵営、練兵場、射撃場、衛戍病院等々）
その広さは約15ヘクタール、兵営の敷地には戦後に県立松江工業高校が移転
→広大な用地はどのような方法で提供されたのか？63連隊誘致が松江にもたらしたものは経済振興だけなのか？

⑴多大な負担
・用地は松江市から陸軍に献納されることになっていた
・土地買収経費は市民の寄附金（総額17万円）
3万円（郡尚武会）＋2万円（松江・広瀬・母里の旧藩主）＋12万円（松江市民）
松江市民の負担の内訳　5万円（市内有力者）＋7万円（左記以外の市民／所得税・戸数割の賦課額を基準に市内各町に割り当て）【史料1】
→事実上の追徴課税「市税を二重に負担すると均し」（『山陰新聞』1907年8月19日）
・負担が重かったからこそ、その見返りをめぐる地域間対立は熾烈化
例、兵営道路新設問題　　津田街道派vs雑賀本町派（＝市会の多数）【史料2】

⑵「陸軍記念日」祝賀行事
・奉天会戦1周年を前に陸軍省が3月10日を陸軍記念日にすることを決定【史料3】
・1911（明治44）年より模擬戦実施【史料4】
市民の見物客多数、連隊主催の祝祭という性格が濃厚
・1929（昭和4）年からは市街模擬戦
城山公園に陣取る防御軍vs市街各方面から攻め上る攻撃軍という設定
各種学校の男子学生も模擬戦の兵力として参加・女子学生は看護に奔走
→さながら学徒動員を想定した軍事演習
・地元紙の協力【史料5】【史料6】
社説等を通じて国民レベルで祝うことを訴え、軍縮の風潮に対しては軍隊の存在を擁護する論陣を張り、大正末・昭和初期からは体験者の回想を掲載
→論説や記事を通じて宣伝される日露戦争観（「東洋平和」の維持のための日露戦争、勝因としての挙国一致・尽忠報国精神＝精神主義の重要性を強調）

☞　63連隊が主催するイベントを通じて総動員体制に巻き込まれてゆく松江市民、それへの積極的協力を引き出すために喚起する日露戦争の記憶

おわりに－本講座の総括－

⑴63連隊誘致の背景と連隊誘致がもたらしたものについて

⑵連隊誘致からみえる都市社会・都市支配をめぐって

【用語解説】師団、旅団、（歩兵）連隊

師団とは、日本陸軍の常備兵力としての最大部隊。言い換えれば平時における最大規模の基本組織。その内部は司令部と歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵という各種部隊で構成されている。さらに、師団の中で歩兵は二つの旅団という単位に組織され、各旅団は二つの歩兵連隊で構成されている。

歩兵連隊は教育の統一、将校団の団結、編制及び歴史に基づき独立して一方面の戦闘任務を果たすのに適切とされ、通常は三個の歩兵大隊で組織される。ちなみに、一個の歩兵大隊は三ないし四個の中隊から組織されており、一個中隊は三ないし四個の小隊から組織される。その規模は、小隊が 40 人程度、中隊は 120 ないし 200 人、大隊は 500 ないし 600 人程度が普通の規模。したがって連隊の規模は通常 2000 人前後となろう。

次に師団が全国各地にどれぐらい配備されていたのかということについて、明治時代に絞って概要を説明しておく。まず、戦前日本の陸軍の軍事組織が整備されて、初めて師団が設けられたのは 1888（明治 21）年のこと。その時は合計 7 個師団（近衛＋1 東京、2 仙台、3 名古屋、4 大阪、5 広島、6 熊本）が設けられた。

次いで日清戦争後の軍拡で 6 個師団が増設されることになる（7 旭川、8 弘前、9 金沢、10 姫路、11 善通寺、12 小倉）。さらに、日露戦争中に 4 個師団（13 仙台、14 宇都宮、15 名古屋、16 京都）、日露戦争直後の 1907（明治 40）年に 2 個師団（17 岡山、18 久留米）が増設されている。

【主要参考文献】

a　歩兵第六十三聯隊史編纂委員編『歩兵第六十三聯隊史』（1974）

b　津田・古志原郷土誌執筆専門委員会編『津田・古志原郷土誌』（1982）

c　乃木郷土誌編集委員会編『乃木郷土誌』（1991）

d　原剛・安岡昭男編『日本陸海軍事典コンパクト版（上）』（新人物往来社、2003）

e　荒川章二『軍隊と地域』（青木書店、2001）

f　本康宏史『軍都の慰霊空間』（吉川弘文館、2002）

g　坂根嘉弘編『軍港都市史研究 I　舞鶴編』（清文堂、2010）

h　松江市教育委員会『松江の歴史像を探る〔松江市ふるさと文庫 10〕』（2010）

i　竹永三男「旅をする市長―初代松江市長・福岡世徳の旅―」（井ヶ田良治編『歴史の道・再発見』〈フォーラム A、1994〉）

j　福岡世徳文書研究会「初代松江市長・福岡世徳文書（五）」（『山陰研究』2 号、2009）

k　山崎祥子「松江市の連隊誘致からみる軍隊と地域との関係」（2011 年度島根大学法文学部卒業論文）